

マロ語の音素目録*

乾 秀行[†]

キーワード：マロ語、少数言語、音素目録、基礎語彙

1 はじめに

本研究の目的は、エチオピアのオモ系の中の北オメト諸語¹に分類されているマロ語 (Malo)²の音韻体系を明らかにすることである。具体的には先行研究 (Siebert & Caudwell 2002) で提示された語彙データの音声記述を再度詳細に検証し、その過程でマロ語の音素を確定し、語彙を正しく音素表記することである。

*本研究のデータは2006年3月および2007年3月にエチオピア連邦民主共和国内のラハ (Laha) でフィールド調査して収集したものである。インフォーマントをお願いした Taariku Oshenna 氏は、父親がマロ語母語話者、母親がバスケット語母語話者で、バスケット語地域 balt'a 村で生まれ、その後近隣のラハ (マロ語地域) で生計を立てておられる。また筆者のバスケット語インフォーマントでもある Fiqre Dejene 氏も、マロ語に関する十分な知識があるということで、筆者の記述の間違いを確認してもらった。ここに感謝の意を表したい。なお本研究は、平成16～22年度科学研究費基盤研究 (B) 「オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築」代表乾秀行 (山口大学) (課題番号 16401008, 19401023) による研究成果の一部である。

[†]山口大学人文学部

¹Fleming (1976) による。Bender (1976) は中央オメト諸語に分類している。

²Ethnologue では、言語名として “Melo” で登録されていて、“Malo” は別名として挙がっている。言語を特定する ISO 639-3 は 「mfx」 である。本研究ではインフォーマントの発音およびマロ語の母音体系を踏まえて “Malo” という言語名を採用することにする。話者数は1998年の調査で20,151人 (モノリンガルは13,264人) となっている。一方 Aklilu & Siebert (2002) には1984年の調査で58,039人という数字が挙げられている。さらに Siebert & Caudwell (2002) には1995年調査時点でラハ地域だけで約98,000人のマロ語話者がいると記載されている。

2 先行研究

これまでのマロ語の記述言語学的研究は、管見によれば Siebert & Caudwell (2002) のみである。これは、1995 年に夏期言語研究所 (Summer Institute of Linguistics) がアジス・アベバ大学のエチオピア学研究所 (Institute of Ethiopian Studies) と協力して行った語彙調査³である。この調査は 1995 年 2 月 28 日にラハ (Laha) で行われたもので、このプロジェクト (Survey of Little-known Languages of Ethiopia, 以下略して S.L.L.E.) で用いられた約 320 の語彙リストに基づいて記述されている。しかし、わずか一日の調査だったため、当然のことながら多くの間違いが含まれている。これはインフォーマントが調査者の意図と異なる語彙を答えているのがその最大の要因で、時間をかけて調査をしないとこの種の誤りは防げない⁴。それと同時に、おそらくしっかりと音素解釈がされていなかったために、先行研究の記述だけではマロ語が実際にどのような音韻体系を持っているか全くわからないままである。そのため単語ごとの詳細な音声表記がかえって利用価値を下げていると言わざるを得ない。

以上より、明らかな誤解に基づいて記述された語彙はできるだけ考察の対象外にして、先行研究の記述と本研究での記述を比較対照しながらマロ語の音素目録を確定することにする。なお、8 節に先行研究と本研究の語彙リストを挙げておくので参照されたい。

3 比較対照語彙

3.1 調査方法

今回のマロ語の調査は、マロ語母語話者の中心的居住地であるラハで、インフォーマントである Taaliku Oshenna 氏他 2 名のマロ語母語話者に、筆者のバスケット語の母語話者でマロ語についても十分な知識を持った Fiqre Dejene 氏を加えて、先行研究の語彙と比較対照しながら実施した。調査

³語彙調査以外に簡単な社会言語学的調査をしている。

⁴たとえば語彙リストの 201 番は “hó’o” が正しいのであるが、先行研究では「スープ」を意味する “waré” になっている。実は本研究でも初めに質問した時に同じ間違いをインフォーマントがした。「熱い」といえば条件反射で「スープ」と答えたというわけである。

方法は、先行研究に倣ってエチオピアの公用語であるアムハラ語の語彙を媒介にして一つ一つ語彙を質問した。

まず先行研究の Siebert & Caudwell (2002) の語彙リストの特徴について言及しておく。S.L.L.E. の 320 個の語彙リストのうち、通し番号の 41, 203 はそもそも数字が見当たらず、251, 293, 300 は番号自体はあるものの語彙が挙げられていない。また 178 は 52、234 は 201、273 は 320a と同じ語彙のため、それぞれ欠落している。ただし、320 が a から h までの 8 個に分かれているので、結果として合計で 319 個の語彙が挙げられていることになる。

その 319 個のうち、1 つの番号に 2 つの語彙が挙げられているものが全部で 49 個存在し、それらは音声的に極めて類似した異形態と全く異なる形態（おそらく類義語⁵）の両方が混在している。

そこで本研究では、319 個の語彙及び先行研究で番号が挙がっているけれども語彙が挙げられていない 3 つを加えた、合計 322 個の語彙を調べ、できる限り 1 つの語彙項目に対して 1 つの語彙を挙げるように心がけた。その結果、229 番を除く 321 個の語彙を収集した。なお、収集の過程で音素解釈についても慎重に吟味し、2007 年 3 月の調査の最後に、調査結果の再確認のためインフォーマントに収集したすべての語彙を発音してもらい、デジタルビデオおよび IC レコーダで録画および録音した。

3.2 一致語彙

上記のような手続きで収集した 321 個の語彙と Siebert & Caudwell (2002) の語彙を比較した結果、音声的に説明の付きそうなものはできるだけ一致した語彙として処理した。つまり、両研究のインフォーマントが同じ意味の語彙をイメージして発音したものと判断した。その結果、全く一致しない語彙が全部で 79 個あった。全く一致しなかった理由としては、方言差というもの考えられないわけではないが、方言差は現時点では小さいと考えている。というのもインフォーマントにラハのマロ語と異なるガイツァ(Gajtsa) 方言との違いについて質問した時、/j/が/w/で現れる例 (274

⁵インフォーマントが複数の語彙を挙げたため、決定できず 2 つの語彙を列挙したと思われる。

番:ba:ja(Laha), ba:wá(Gajtsa) について説明を受けたが、それ以外に目立った音声上の違いを確かめることはできなかった。したがって大半は Siebert & Caudwell (2002) が時間の限られた状態で調査したために、インフォーマントが調査語彙を単純に誤解して別の語彙を答えたためであろう⁶。

そこでこれらの数字を除いた合計 243 個の語彙は、両記述に音声表記に差があるものの、インフォーマントが調査語彙を正確に理解して答えた語彙と考えることにした。以降は先行研究の音声記述が基本的に正しいという前提にまず立ってみて、これらの語彙の両表記を中心に比較しながら、論を進めることにする。

4 母音

まず、Siebert & Caudwell (2002) の語彙データの母音表記の部分を詳細に検討し、その問題点を指摘した上で、最終的に本研究で確認した母音体系を提示することにする。

Siebert & Caudwell (2002) では、音声表記として短母音だけで合計 12 の母音記号が使われている。さらにいくつかの長母音表記⁷も見られ、それを含めるとかなり複雑な体系となる。それぞれの母音を出現頻度の多い順に表すと表 1 のようになる。またそれを母音体系にしてみると表 2 のようになる。

⁶Siebert & Caudwell (2002) で 2 つの語彙が挙げられているもののうち、どちらかが本研究の調査結果と音声的に類似している場合には一致したものとして数えた。また、Siebert & Caudwell (2002) の動詞形が {-e/ε(:)za/Λ} という形で統一されているのに対して、本研究では 3 人称男性完了形 {-is} で統一させているので、活用部分の不一致は致し方ない。補足すると、マロ語ラハ方言の動詞は未完了形と完了形に分かれ、動詞「行く」の完了形 “bis” を例に取ると、未完了形は 1sg:bais, 2sg:baisa, 3sg.m:beis, 3sg.f:baus, 1pl:bo:s, 2pl:be:ta, 3pl:bo:sona と活用し、一方完了形は 1sg:bas, 2sg:badasa, 3sg.m:bis, 3sg.f:badus, 1pl:bidos, 2pl:bideta, 3pl:bidosona と活用する。その後、2007 年 12 月のバスケット語調査の際に Fiqre Dejene 氏から教わったところ、先行研究の活用形 {-e/ε(:)za/Λ} はガイツア(gajtsa) 方言の 1 人称単数未完了形あるいは 3 人称男性未完了形であることが判明した。しかし、その時は車のタイヤトラブルによりマロ語が話されている地域には行くことができず、最終確認には至っていない。なお、マロ語の文法に関しては現在準備中で別の機会に論ずるつもりである。

⁷長母音表記は約 50 例程度見られるが、その大半は脚注 6 で説明した動詞語末形として現れている。

表 1: S&C の母音の出現頻度

[ɑ]	225	24.51%
[e]	152	16.56%
[ʌ]	94	10.23%
[i]	90	9.80%
[ɛ]	90	9.80%
[o]	78	8.50%
[u]	71	7.73%
[ɔ]	62	6.75%
[ɪ]	26	2.83%
[ʊ]	12	1.31%
[ə]	10	1.09%
[ɨ]	8	0.87%
計	918	99.98%

表 2: S&C の表記による母音体系

i/ɪ	i	u/ʊ
e	ə	o
	ɛ	ʌ
		ɔ
		ɑ

4.1 出現頻度

一見してわかるように、下位 3 個の母音 [u], [a], [i] の出現頻度が 1% 前後で極めて低い。このような機能効率で果たして音素として機能しているのか疑わしい。そこでまずこれらの音が現れる音環境を調べてみると、以下の番号の語彙に現れている⁸。

[u](12): 25, 35*, 42, 104, 105, 124, 128, 133, 303, 313

[a](10): 13, 133*, 187, 230, 231, 237*, 240*, 254, 305*, 312

[i](8): 20, 44, 72*, 133, 139, 153, 230

これらの音が、本研究で調べた語彙の中でどのように表記されているか検証してみることにする。まず [u] に関してであるが、対応する例では /u/ が殆どで、/u/ の異音として解釈することが可能と思われる (25, 42, 104, 128, 133, 303)。残りは /a/ (105)、/o/ (124)、/e/ (313) にそれぞれ対応するが、これらを音声学的に説明することは難しい。単なる記述ミスかインフォーマントの発音の不正確さなどに要因を見つけるしかあるまい。次に [a] は、対応する例では /e/ (187, 230, 231, 254, 312) が殆どで /e/ の異音として解釈して差し支えないであろう。残りは /a/ (13) である。なお、この母音に関しては、直前の音節にアクセント（さらに長母音の場合も）がある語末音節で現れる場合が殆どで (13, 133, 187, 230, 231, 237, 240, 254)、残りの例も語末ではないけれども、やはりアクセント（長母音）のある音節の直後の音節 (305, 312) に現れている。つまり、この曖昧母音 [a] の解釈はマロ語のアクセント解釈と大きく関連する。結論を先に述べれば、マロ語のアクセントは本研究で調べたところ高低アクセントと解釈すべきであり、強弱アクセントでは決してない。したがって、このような曖昧母音を音素として設定する必要性はないと考えられるので、そのまま /e/ として解釈するのが妥当であろう。最後に [i] である。対応する例の多くは /i/ (20, 133, 139, 230) で、こちらも /i/ の異音と解釈して差し支えないであろう。残

⁸ 1 つの単語の中に同じ母音が複数回現れることもあるので、総数 () と番号の数は一致しない。なお番号の後ろの「*」は本研究との対応例がない語彙である。

⁹ 本研究の対応例に関しては、最終的に音素解釈をしているので、「/ /」で表記している。

りは/u/(153)、/e/(44)である。ところでこの音が現れる環境は、歯音(s, z, d, ts, ts')の直後である場合が殆どである(20, 72, 133, 139, 153, 230)。そのような音環境が中舌化を促したものと思われる。なお44番だけは/k'/の直後に現れるが、この音声学的説明は難しい。

この延長線上で、4番目に出現頻度の低い[i]を見ておこう。ただし、ここからは例の数が多くなるので、紙面の都合上すべての対応例を見ていくことはできない。典型的な例を挙げて、説明することにする。なお、以後「/」で区切られた語彙は、前者が先行研究、後者が本研究の調査結果を表すことにする。さて、この音[i]も対応する例と比較してみると、多くはアクセントのない/i/に対応する(38番:wódire/wódire)ことがわかった¹⁰。基本的にはアクセントのない前舌狭母音/i/の弱化した形として解釈されたのであろう。これもマロ語のアクセントを強弱アクセントと解釈したためであり、したがって多くの例に関しては/i/と解釈して問題ないと思われる。

以上、出現頻度の少ない方から4個の母音について、音素解釈を行うと以下のような関係になっている。

/i/: [i]~[ɪ]~[i]

/e/: [e]~[ə]

/u/: [u]~[ʊ]

4.2 開口度

次に開口度に関して見ていく。Siebert & Caudwell (2002)には狭母音、半狭母音、半広母音、広母音の4段階の表記上の違いが見られる。つまり、前舌母音の[e]と[ɛ]、後舌母音の[o]と[ɔ]が区別されて表記されている。

そこでまず前舌母音から見ていく。半狭母音[e]は、本研究で調査した語彙と比較したところ、大半は/e/で対応して出てくる(172番:gelaǰó/gelaǰó)。一方半広母音の[ɛ]の方は、/e/ (154番:k'éǰe/k'eǰé、298番:méla/méla)

¹⁰/e/や/u/に対応する例もまれに見られる。

と/a/ (53 番 : ts'ép'o/ts'a6ó、221 番 : ts'érko/tf'arkó) の両方の音と対応している。つまり、Siebert & Caudwell (2002) の半広母音の解釈は、本研究と比較したところ、あまり対応しておらず、半広母音を 1 つの音素として認定できるかどうか疑わしいと思われる。

ところで前舌母音に関して、半狭母音と半広母音の区別が存在しないと判断できる客観的な証拠がある。それは動詞語末形である。Siebert & Caudwell (2002) の動詞の語末形は、前述したように、ある場合には {-e(:)za}、ある場合には {-e(:)za} という形で記述されている。仮に半狭母音と半広母音がそれぞれ異なる音素として機能しているのであれば、これらの形態に関して何らかの形態音韻論的解釈ができなければならない。しかし残念ながら音環境を見る限りそのような説明は不可能で、全くもって恣意的に半狭母音と半広母音が記述されていると言わざるを得ない。以上より、結論としてこれら 2 つの音は、先行研究の音声記述が正しかったとしても、自由異音の関係にあることを物語っているといえる。最後に、本研究では半狭母音と半広母音を入れ換えてインフォーマントに確認したが、音素としての対立が存在することを一切確認できなかった。したがって、先行研究で半広母音として表記されているものの一部は半狭母音/e/、もう一部は広母音/a/と解釈して差し支えないであろう。

次に後舌母音を見てみる。後舌母音の半狭母音 [o] は、本研究で調査した語彙と比較したところ、前舌母音同様、大半¹¹は/o/で対応して出てくる (3 番 : sínó/sinó、73 番 : ?újo/afó、248 番 : ?ótf'o/ótf'o)。一方、半広母音の [e] の方は、半狭母音 [o] の場合と同じで、大半は/o/で対応している (32 番 : zók^ho/zókko、162 番 : móló/moló、258 番 : ló?o/ló?o)。そこでこれらの語彙に関して半狭母音と半広母音を入れ換えてインフォーマントに確認したところ、音素として対立していることは確認できなかった。したがって、後舌母音に関しても半狭母音と半広母音の対立がマロ語にはないことが判明した。

以上より、前舌も後舌も半狭母音と半広母音の区別があるという音素解釈はできなかった。

¹¹語末のアクセントのない音節で一致しない例が稀に見られる。

/e/:[e]~[ɛ]

/o/:[o]~[ɔ]

4.3 曖昧母音 [ʌ]

最後に残った母音は [ʌ] である。この母音がよく現れるのはアクセント表記のない動詞語末音節である (88 番: k'uféʌ, 93 番: hajk'éʌ)。しかし、これは同時に [a] でも現れている (184 番: paidé:za, 194 番: ?o:tsé:za)。すでに前舌母音の所でも論じたように、これらの母音の違いが音素として機能しているのであれば、何らかの形態音韻論的な説明ができなければならないが、そのような解釈は不可能である。つまり、仮にこのような音が具現されているとしてもそれは自由異音でしかない。なお、本研究との比較では、大半は /a/ で対応して出てくるので、/a/ と解釈して差し支えないであろう (27 番: háʃe/háʃé, 45 番: wozánʌ/wozaná, 149 番: háre/haré)。以上より、音素解釈を行うと以下のような関係になっている。

/a/ : [a]~[ʌ]

4.4 母音のまとめ

今まで先行研究の母音の記述と本研究の母音の音素解釈を比較対照しながら検討してきた。まとめると、マロ語は 5 母音でそれが長短の区別を持つ体系と考えるのが妥当であるとの結論に達した。先行研究ではマロ語を強弱アクセントを持つ言語と考えて記述した結果、複雑な母音体系を構築してしまったと思われる。なお、5 母音体系はこのあたりのオモ系言語の母音特徴と一致しており、地理的分布から見ても極めて自然な解釈といえる。

最後に、本研究で調べた母音のそれぞれの出現頻度を表 3、母音体系を表 4 にそれぞれ示す。

表 3: 本調査の母音の出現頻度

/i/	131	16.86%	/i:/	12	1.54%
/e/	123	15.83%	/e:/	16	2.06%
/a/	255	32.82%	/a:/	25	3.22%
/o/	120	15.44%	/o:/	14	1.80%
/u/	65	8.37%	/u:/	16	2.06%
計	694	89.32%		83	10.68%

表 4: マロ語の母音体系

i		u	i:	u:
e	o		e:	o:
a			a:	

5 子音

次に子音表記について見ていく。まず先行研究の Siebert & Caudwell (2002) の語彙データの子音記号をすべて抽出して子音体系を作成し、それが類型論的あるいは類型地理論的に見てどのような問題点があるかを指摘する。次に本研究での記述と比較対照することで、最終的にマロ語の子音音素を提示することにする。

Siebert & Caudwell (2002) に使われている子音記号が仮にすべて弁別的対立を持つと仮定すると、合計で 39 の音素があることになる。それを以下に列挙してみる¹²。

/p, p^h, β, t, t^h, ts, ts^h, ts', tʃ, tʃ^h, tʃ', k, k^h, k', k^w, ʔ, b, β, d, d, ɕ, g, g^w, φ, f, s, ʃ, β,

¹²語彙リストの中には一部 [s'] や [c'] という記号が使われているものがあるが、これらは孤立して現れる上、その音価が特定できないので、誤植と考えて、それぞれ [ts'] および [tʃ'] と解釈し直した。

z, ʒ, h, m, n, ɲ, r, l, j, w/

しかし、このままではマロ語がどのような子音体系になっているのかわかりづらいので、以下では、閉鎖音、摩擦音、鼻音・流音・半母音の3つに分けて議論することにする。

5.1 閉鎖音

Siebert & Caudwell (2002) の記述に用いられている閉鎖音の数はかなり多い。そこでまず調音様式ごとにいくつの系列があるか調べてみると、無声無気音、無声有気音、放出音、有声音、有声入破音、無声入破音の6系列が存在することになる。

無 声 音 : p, t, ts, tʃ, k, kʷ, ʔ

有 声 音 : b, d, dʒ, g, gʷ

無声有気音 : pʰ, tʰ, tsʰ, tʃʰ, kʰ

放 出 音 : tsʰ, tʃʰ, kʰ

無声入破音 : β

有声入破音 : b, d

ところでこのような6つの調音様式の違いを閉鎖音体系に持つ言語は、類型論的に見て極めて特異で、乾 (1992) によれば、世界の 1,000 言語についてこのような調音様式の区別を持った閉鎖音体系を持つ言語は実在していない。

そこでまず問題になるのが、無声入破音の系列である。この無声入破音 [β] が現れる語彙は 78 番 (βuβʌle) だけであり、その第 1 音節に現れる有声入破音 [b] と、いわば有声と無声で対立していることになる。しかし、本研究で確かめた限りでは、これが音韻的に対立しているという証拠はなく、無声入破音がたとえ具現していたとしても、おそらく有声入破音の自由異音と考える方が自然で、そう解釈して全く問題ないとの結論に達した¹³。なお本研究のインフォーマントは有声入破音で発音しており、有声

¹³筆者が以前同じオモ系のコイラ語 (koyra) の簡単な語彙調査をした際も、この「卵」と

入破音として記述した (buβúle)。

この結果、無声入破音の系列を外すと 5 系列になる。これを無声音と有声音のグループに分けると、無声音グループに関して 3 系列を、有声音グループに関して 2 系列を、それぞれ持っていることになる。無声音の 3 系列はいわば朝鮮語などと同じ体系であり、有声音の 2 系列もよくあるタイプである。それを合わせた 5 系列の体系も類型論的には存在可能である。

しかし類型地理論的に見て、一般にこのあたりのエチオピアのオモ系言語の音韻体系を勘案すると、閉鎖音には無声音、有声音、放出音の 3 系列に、入破音が加わる 4 系列を持つのが通常で、当然マロ語にもそのような体系であることが予測される。そこで次に問題になるのが無声有気音の系列である。

無声有気音の表記を本研究で調査した語彙と比較してみると、多くは無声閉鎖音 (36 番: tʰóhɔ́/tóho、39 番: kʰúje/kúje、47 番: tʰíre/tíre、61 番: kʷɔ́ntʰe/konté、62 番: bɔ́kʰéza/bo:kés、66 番: má:tʰa/martá) と対応する。それ以外には重子音 (13 番: ?áǰʰə/attjá、24 番: jekʰé:za/jekkís、32 番: zókʰɔ́/zókko、63 番: tʰukʰéza/tokkís) に対応する場合もある。また、語末音節の母音表記のない場合 (21 番: sipíntʰ/síppintsa、46 番: sútsʰ/sútsa) に現れることもある。つまりこの対応からだけでは、先行研究の無声有気音表記を説明することは難しい。

ところでこの表記の最大の謎は、168 番の [sikʰéza] を最後に、320 番まで全く無声有気音表記が現れない点である。それまでの出現頻度からすると、その後 150 個余りの語彙に全く有気音が現れないというのにはあり得ない。1 番から順番に調査していたとするならば、調査者が途中から有気音表記を止めたと推測せざるを得ない。

さて本研究でインフォーマントに確認した限りでは、無声有気音の系列が音韻的に無声無気音と対立している証拠はなかった。また類型論的に見た場合、放出音と対立する無声音は、その違いをより鮮明にするために、余剰特徴として有気化する傾向がある点もこの結論を支持するものと思わ

いう語彙の記述が問題となり、無声入破音か有聲入破音かで判断を迷ったことがある。コイラ語には入破音がこの語彙以外には現れず、類型論的には無標である有聲入破音として記述したいところなのだが、何度聞き直しても第 1 音節も第 2 音節も有聲には聞こえなかったことがある [βuβúle]。

れる。

次の問題点は、軟口蓋の位置で無声音と有声音に唇音化の音声記号が現れることである。先行研究でこれらの唇音化音が現れる語彙はわずか 2 例で、後続母音が後舌の円唇母音の時のみ (61 番: k^wɔnt^he、134 番: g^wɔjnɔɔɔ, g^wɔinó) であり、よって /k/, /g/ の余剰特徴と解釈して差し支えないであろう。

最後に問題になった音は [ɕ] で、本研究では確認できなかった。先行研究でこの音が出てきた語彙も「カヌー」で、マロ語周辺にはカヌーを使うような大きな川は存在しない。つまり、これはマロ語社会では存在しない語彙である (229 番: ɕɛlba/)。

以上より、有気音の系列は無気音として解釈し直し、マロ語の閉鎖音の系列は無声音、有声音、放出音、入破音の 4 系列であると考え、合計で 14 個の音素があると結論づけることができる。

無声音 : /p, t, ts, tʃ, k, ʔ/

有声音 : /b, d, g/

放出音 : /ts', tʃ', k'/

入破音 : /β, d/

5.2 摩擦音

次に摩擦音を見ていく。Siebert & Caudwell (2002) では、以下の 8 つの摩擦音の表記がある。

摩擦音 : φ, f, s, ʃ, β, z, ʒ, h

まず唇音の位置から見ていく。この記述では、無声音に両唇音 [φ] と唇歯音 [f] の 2 種類が存在していることになる。この両音素の対立はニジェールコンゴ語族のエウエ語にあるのが有名であるけれども、類型論的には極めて珍しい現象である。ところで多くのエチオピアの言語では唇音の位置で閉鎖音と摩擦音が交替形としてよく観察され、それらは決して別

音素ではない。つまり、/p~f/の交替が同時に、ここで問題となる/φ~f/あるいは/p~φ~f/のような交替を想定しておけば解決されるであろう。ちなみに、本研究のインフォーマントは常に両唇摩擦音 [φ] の方で発音していた。同様に有声音 [β] もわずか 2 例 (69 番: ?áβεβΛ、174 番: gaβaré:) であるが、これも/b~β/と考えるおけば/b/の異音と解釈できるであろう。つまり、母音間で有聲閉鎖音が摩擦音化する現象で、これもまだ音素として確立されていない。

次に [ʒ] を見ておく。先行研究の記述で 2 例 (83 番: wuʒé:za、87 番: fʰoʒézΛ)、本研究ではわずか 1 例 (253 番: ʒuguddís) しか確認できなかった。機能効率が低い音素であると考えられるので、本研究では暫定的に()に入れておく。

最後に先行研究では記述がなかった音が本研究で見つかった。声門摩擦音/h/の有声音/ɦ/である。今のところ 1 例だけ (161 番: fiángartʰo) であるので、こちらも()に入れておく。以上より、摩擦音は全体として次のようになった。

摩擦音: /φ, s, ʃ, z, (ʒ), h, (ɦ)/

5.3 鼻音・流音・半母音

最後に鼻音・流音・半母音について見ておく。Siebert & Caudwell (2002) に見られる表記は、次のとおりである。

鼻 音: m, n, ɲ, ŋ

流 音: r, l

半母音: j, w

ここで問題となるのは鼻音の系列である。まず硬口蓋鼻音 [ɲ] の解釈である。Siebert & Caudwell (2002) でこの音が現れるのはわずか 1 例だけ (48 番: fʰiɲɲ) である。一方、本調査ではこの 48 番の語彙は全く異なる形で現れ (á:tfʰo)、また他の語彙調査からもこの音は一切出てこなかった。先行

研究の記述を音環境から推測すると、先行する狭母音 [i] の影響で鼻音 [n] が口蓋化したのを音声的に記述したと考えるほかはないであろう¹⁴。以上よりマロ語にはこの音が音素として存在しないと結論づけることにする。もう一つは軟口蓋鼻音 [ŋ] の解釈である。この音が現れる環境はすべて、後続子音の軟口蓋閉鎖音 /k/ あるいは /g/ の前のみである。よって /n/ の条件異音と考えて差し支えないであろう (34 番: búŋk'e、140 番: j'áŋgə)。なお、本研究でも同様のことが確認できた。以上よりこの軟口蓋鼻音を /n/ の異音として解釈することにする。

流音に関しては、本調査でもふるえ音の /r/ と側面音の /l/ の 2 種類が確認された。一方半母音についても、/j, w/ の 2 つがあることに先行研究および本研究に差はなく、特に問題はなかった。以上より、鼻音・流音・半母音は次のようになった。

鼻 音 : /m, n/

流 音 : /r, l/

半母音 : /j, w/

5.4 子音のまとめ

この節では先行研究の子音の音声記述の問題点を、類型論的あるいは類型地理論的観点を絡めながら議論してきた。その結果、閉鎖音に関しては、先行研究のような 6 系列の調音様式の違いがあるのではなく、4 系列 (無声閉鎖音、有声閉鎖音、放出音、入破音) であることが明らかになった。また、摩擦音、鼻音に関しても、いくつかの修正を行った。

なお、一つだけ残された問題がある。重子音の扱いである。マロ語には同一音素連続の重子音が比較的よく現れる。しかし同時にマロ語には重子音以外にもいくつかのタイプの子音連続が様々な環境で現れる。また何らかの形態論上の振る舞いに重子音が大きく関わっているという証拠も今のところない。以上より同一子音連続の重子音だけを一つの音素として解釈

¹⁴この硬口蓋鼻音はアムハラ語にはお馴染みの音である。

する必然性はないと思われる。

その結果、マロ語の子音音素は全部で 27 で、以下のようになった。

無声音 : /p, t, ts, tʃ, k, ʔ/

有声音 : /b, d, g/

放出音 : /ts', tʃ', k'/

入破音 : /β, dʒ/

摩擦音 : /ɸ, s, ʃ, z, (ʒ), h, (ɦ)/

鼻音 : /m, n/

流音 : /r, l/

半母音 : /j, w/

6 アクセント

マロ語は単語の弁別に関して、音素以外に高低アクセントを相当程度利用していて、極めて重要な役割を演じている。たとえば 36 番の「足」の意味の “tóho” に対して、アクセントを第 2 音節に移動させた “tohó” は「重い」の意味になる。ただし、今回は母音・子音の音素解釈が目的であるので、アクセントについては後述の語彙リストにアクセント記号「´」をつけて表すのにとどめ、詳細な議論は別の機会に譲ることにする。

7 まとめ

本研究では、先行研究の Siebert & Caudwell (2002) の語彙調査に基づいて、再度詳細な語彙調査をすることで、マロ語の音素目録を確定した。

確かに初期調査の目的としては、下手に音素解釈をしないで、できる限り具体的な音声表記だけをしておくのも 1 つの見識であると思われる。しかし、Siebert & Caudwell (2002) の 1995 年に行った調査以降、10 年以上もの間新たな調査は行われておらず、このデータだけが残っていることはマロ語の研究にとって不幸なことであった。今回マロ語の音素に関して本

研究で詳細に記録したことで、今後マロ語の記述研究が進むことを期待したい。

8 語彙リスト

最後に本研究で用いた語彙リストを挙げておく。Siebert & Caudwell (2002) と本調査の結果が全く異なる語彙の番号の後には「*」をつけた。また、先行研究の記述のうち、脚注で修正を提案した [s'] [c'] をそれぞれ [ts'] [tʃ'] とする以外に、重子音の表記がたとえば [m:] のようになっている、長母音表記と同じ記号では見づらい。そこで重子音に関してはたとえば [mm] のように子音字を重ねて表記することにする。

No	English	S&C(2002)	本研究
1	hair	tʃ'ímba, binánna	biná:na
2*	head	k'ómmo	hú:ʃe, hú:ʔe
3	forehead	síno	sóm'ʔo, sinó
4	ear	háje	hajtsé
5*	hear	sizóba	sí:jis
6	mouth	dóna	do:ná
7*	blow	p ^h úgeza	ʃunnís
8	whistle	su:k'it ^h éza	sújk'is
9	sing	ʔijetséza	jettsís
10	dance	ʔijetséza, kupéza	guppé:s
11	drum	kébero	karabó
12	lip	dóna, méteʃe	metterfá
13	tooth	ʔátʃ ^h ə	attfá
14	tongue	ʔirínts	ints'ársa
15	saliva	ts'útʃ'	tʃ'útʃa
16	sweat	tʃ'áwa	tʃ'áwa
17*	chin	ʃáγγala, ʔú:ʃe	gáutʃe
18	beard	butʃé, ʔautʃánesu	bu:ʃé
19	nose	síte, síde	sí:de

No	English	S&C(2002)	本研究
20	smell	sawísis, siŋgé:za	singís
21	eyebrow	sipínt ^h	síppintsa
22	eye	?áφe	ájφe
23	see	be?é:za	bejís
24	weep	jek ^h é:za	jekkís
25	tear	?aφóts ^h	áφuntsa
26	neck	k'ót'e, mǝrgé	k'ó:de
27	shoulder	hájfe	hajé
28	breast	dáns	dántsa
29	belly	?úlat ^h ɔ	úlo
30	navel	gulat ^h ɔ, gulál?e	gual?é
31	guts	marátf'e	marátf'e
32	back	zók ^h ɔ	zókko
33*	buttocks	ts'úne	dullé
34	knee	púŋk'e, búŋk'e	búnk'e
35*	elbow	kuʃabóŋk'e, búrfje	su:k'é
36	foot	t ^h óhe, t ^h óhɔ	tóho
37*	sandals	nets'éla, k'á:k'a	sulíppare
38	thigh	wódire	wódire
39	hand	k ^h úfe	kúfe
40	forearm	k'ése, búrtfe	k'ése
42	finger nail	ts'úŋguts ^h	ts'ungúttsa
43	skin	gallamá?o, sárpa	galbá
44	bone	mek'íts'	mek'éttsa
45	heart	wozána	wozaná
46	blood	súts ^h	súrtsa
47	liver	t ^h íre, kilahó	tíre
48*	bush	tʃígíj, durúma	á:tʃ'o
49	thorn	?aŋgúts ^h	aŋgúttsa
50	tree	míts, ?arzá:fe	míttsa

No	English	S&C(2002)	本研究
51	axe	k ^h ánde, kálta	kálta
52	bark	φúk'ó	pok'ó, φok'ó
53	root	ts'ép'ó	ts'abó
54	leaf	jétfε, má:tahai	ma:tá hájtsa
55	rope	wæderó	wodoró
56	basket	ʃák'ó, dá:tfó	datfó
57*	farm, field	wót ^h Λ	goʃʃá
58*	seed	zérɛt ^h	k'átsa ájφε
59*	harvest	ʃiʃíza, ʔuduhúne	bóne
60*	machete	báhtʃa	k'ánts'ó
61	hoe	k ^w ɔnt ^h e	konté
62	dig	bɔk ^h éza	bo:kés
63	plant	t ^h uk ^h éza	tokkís
64	maize	bɔdél:Λ	badalá
65	tobacco	t ^h ámbe	tambó
66	grass	má:t ^h a	ma:tá
68	weed	háɾame	háɾme
69*	flower	ʔáβεβΛ, φúde	búne
70*	fruit	ʔápe	frafré
71	ripe	k ^h ats'éza	káidega
72	rotten	zihek'éza, wok'é:za	wokk'ídega
73	meat	ʔáʃo	aʃó
74	cut	ga ^h éza	k'ants'ís
75	steal	k ^h εstéza	kajsís
76	give	ʔiŋgézΛ	immís
77	fat, grease	mót'e, móde	módfó, wórde ¹⁵
78	egg	βuβale	βuβúle
79	hide	k'osézΛ	k'osís

¹⁵módfó は動物の脂、wórde は人間の脂の意。

No	English	S&C(2002)	本研究
80	hungry	k ^h ʊʃe, naé:za	koʃís
81	cook	k ^h aʔéza	kattsís
82	eat	mé:za	mis
83	drink	nʒé:za, wuʒé:za	ujís
84*	cup	wántʃʼʌ	kobkobbé
85*	gourd	báʃʼe	gosé
86	laugh	miʔʃʼeza	mi:ʃʼís
87	vomit	ʃʼoʒéza	ʃʼójis
88	cough	kʼuféza	kʼuʃís
89	spit	ʃʼut ^h éza	ʃʼúttis
90	sneeze	hetʼɪʃéza	hédderʃis
91*	sick	hargmt ^h éza	sákettis
92*	fall	pɔk ^h eza	kundís
93	die	hɔjkʼéza	hɔjkʼís
94	grave	du:ʃó	du:hó, du:ʃó
95	fool	bó:zo	bó:za
96*	one	p ^h ét ^h ɔ	issó, issínno
97	two	námʔe	namʔá
98	three	hájtsɪ	heddzá
99	four	ʔójddɛ	ojddá
100	five	ʔíʃm	itʃáʃa
101	six	ʔɪzɪp ^h m	usúppuna
102	seven	láp ^h un	lá:puna
103	eight	nósp ^h un	hóspuna
104	nine	ʔódduʃɔn	uddúʃuna
105	ten	tápʼɔ	tammá
106	twenty	lát ^h ɛm	lá:tama
107	hundred	tsát ^h	tsʼéta
108	man	ʔás	asá
109	think	ʔassabéza, kʼopʼe:za	kʼoppís

No	English	S&C(2002)	本研究
110	woman	mátʃ	mátʃa
111	marry	ʔékkoba, kilé:za	ekkís
112*	wedding	sérge	ja:gána
113	bear(v.)	jilé:za	jelásu ¹⁶
114	wife	mátʃo	mátʃo
115	father	ʔábo	a:wá
116	say	gé:za	gis
117	mother	ʔájo, ʔíndo	a:jo
118	ask	hojʃé:za	ojʃé:s
119	child	náʔa	naʔá
120	brother	ʔíʃe	ifá
121	walk	t ^h ohérA, AŋgézA	tohorabís
122	run	wets'éza	wots'ís
123	rest(v.)	ʃɪnp ^h éza	ʃempís
124	sister	miʃó, miʃó	miʃó
125	teach	tɛmarsé:za	tamarisís
126*	chief	dájɪ	kawó
127	God	ts'ós	ts'o:sá
128	name	súns	súntsa
129	animal	dóʔA, méhe	méhe
130	fur	dóʔA ʔik ^h ise	dóʔa ikise
131	hunter	ʃáŋk ^h aʔɛs, naagé:za	ʃanká
132*	hunt	ʔAdAnéza, wodé:za	ʃankaté:s
133	pig	k ^h ɔdɪnsA, gudáillə	guddíntsa
134	tail	g ^w ɔjnAɪA, g ^w ɔinó	gojnó
135	bat	k'Amakáʃo, ʃɪɪʃíʔle	k'ámma kaʃó
136	louse	ʃ'úʃ'	ʃ'ú:ʃe
137	ant	zimándɔ	zimaddó

¹⁶3sg.f. の語形である。

No	English	S&C(2002)	本研究
138	worm	k'útsin	guts'íne
139	fly(n.)	wutsítsɔ	wudíntsa
140	spider	ʃáŋgɔ	ʃangó
141	termite(n.)	ʔólát ^h	óllatsa
142	termite hill(n.)	dúne, ʔolátskets	du:né
143	honeybee	mát ^h , mats	máttsa
144	beehive	hótse	ho:tsé
145	honey	ʔés	é:sa
146	goat	déʃ	deifá
147	horn	k ^h átʃ'e	katʃ'é
148*	cow	háɾ, há:ri	mí:za
149	donkey	háre	haré
150	hit	haʔdé:za, ʃotʃé:za	ʃotʃ'ís
151*	chicken	ʃuwúlá	kútto
152	bird	káʃo	kaʃó
153	claw	ts'ingúts	ts'ungútsa
154	wing	k'éʃe	k'eʃé
155	feather	ʃugúlá, k'éʃe	k'eʃé
156	fly(v.)	p ^h iré:za, piadé:za	ʃuraddís
157	nest	k ^h eʃok ^h ets'	kaʃó ké:tsa
158	snake	ʃóʃ	ʃó:ʃa
159	rat	ʔeʃʃ'eri	eʃʃ'eré
160	kill	wot'eza, wodé:za	woddís
161	scorpion	háŋgartʃo	háŋgartʃo
162	fish	mólɔ	moló
163	fishnet	merábe, molótsok	marábe
164	swim	hátsedé:za	há:tsa waddís
165	frog	ʔuk'ʔane, ʔónak'e	onnak'é
166	thread	kíre	kíre
167	tie(v.)	ʔatʃ'int ^h é:za	k'ájettis

No	English	S&C(2002)	本研究
168	sew	sik ^h éza	sikkís
169*	crocodile	ʔázo	hailafó
170*	fear	jáfa	babó
171	buffalo	míntsá	mentsá
172	monkey	gelafó	gelafó
173	leopard	máhe	ma:hé
174	cat	gaβaré:	gawaré
175	hyena	godaré	godaré
176	dog	kána	kaná
177	listen	siʔé:za	síjis
179*	bark(v.)	woké:za	botʔ'és
180	come	jeʔé:za	jis
181	bite	sats'é:za	satts'ís
182	banana	múze	mú:ze
183	want	koé:za	koj'ís
184	count(v.)	paidé:za	φajdís, tajbís
185	take	ʔeké:za	ek'ís
186	hold	ʔaiké:za	ojk'ís
187	path	toió:gə	tóho oge
188	house	ké:tse	ke:tsá
189*	door	féŋge	wulá
190	sweep	fité:za	k'uttj'ís, φíttis
191	enter	kilé:za	gel'ís
192	exit	kezé:za	kéjis
193	stool	ʔóide	ojdé
194	make	ʔo:tsé:za	o:tsís
195*	sit	beté:za	úttis
196*	stand(v.)	ʔits'éza	ek'ís
197	salt	mats'iné	mats'iné
198	pot	ʔóta	óto

No	English	S&C(2002)	本研究
199	fire	tamá	tamá
200*	burn	ts'uginté:za	é:ts'is
201*	hot	waré	hó?o
202	cold	mé:go	me:gó
204	smoke(<i>n.</i>)	tj'úja	tj'úja
205	ashes	wudó	budó
206	stick	wufé	guφé
207	stone	jútj	jútfa
208*	smooth	?irts'a	lí:k'o
209	earth	bí:ta	bi:tá
210	mud	?urká	urk'á
211	clay	bitá	mánabi:ta
212*	sand	fafé	k'átj'e
213	dust	bún?a	bánna
214	gold	wórk'	wórk'e
215	silver	bíra	bíra
216	money	mí:je	mi:jé
217*	buy	woggéza	jammis
218	sell	?aizéza	bajzís
219*	market	gabé	gijá
220	mountain	deré	deré
221	wind	ts'érko	tj'arkó
222	cloud	jár:ra	ja:rá
223	rain	?íra	íra
224	rainbow	súlla	zúlla
225	lightning	dadá, gánde	dadá
226*	thunder	gú:mes	wal?ántsa, ze:lintso
227*	dew	ts'á:sa	tj'alkó
228*	river	hátse	jár:φa
229*	canoe	ǵélba	/

No	English	S&C(2002)	本研究
230	bridge	dıldılə	dıldıle
231	water	ʔátsə	hartsé
232*	well	ʧ'áre	púlto
233	cold	ʔirts'ʔé:za	írtsa
235*	lake	há'k'	délle
236	sky	səló	saló
237*	night	ʔomátsə	k'ámma
238	moon	ʔagé:na	agéna
239	star	ts'olínto	ts'o:línta
240	sun	ʔawá:tə	awá
241	white	bó:ts	bó:tsa
242	black	kárts	karéttsa
243	red	sóʔo, bazóko	zoʔó
244	green	ʧ'ililó	ʧ'ilílo
245*	yellow	búlla	galál'ʔo
246	brown	búnna:mma	bunna:má
247*	knife	ʧ'ubé	máʧʧá
248	sharp	ʔóʧ'ʔo	óʧ'ʔo
249*	dull	gaʧfoamaʧa	danáze
250*	bow	k'ést	dongé
251*	arrow	/	dongé
252	spear	t'óra	to:rá
253*	throw	ʔugé:za	ʒuguddís
254	shield	gondállə	gondálle
255	war	góla	óla
256	fight	ʔolmtéza	olettís
257	bad	ʔí:ta	í:ta
258	good	lóʔo	lóʔo
259	wide	dálge	dálga
260	narrow	ts'ú:ts'i	ts'úntsa

No	English	S&C(2002)	本研究
261*	straight	pólo	lú:le
262	crooked	wóppo	wóbbo
263	long	?adistsé:	adusá
264	short	k'ántse	k'á:ntsa
265*	big	dámmo	gitá
266*	small	ts'ít'a	gú:tsa
267	thick	órde	órde
268	thin	lé:ʔo	lé?o
269*	heavy	táro	de:tsó
270	light	lá:fa	lá:ʔa
271	old	ts'íma	tʃ'íma ¹⁷
272	new	?orótsi	orátsa
274	none	bá:ja	isinjaka, ba:wá
275	left	haddís	ha:dírsa
276	right	wuʃátʃ	wuʃátʃa
277	yes	?é:	e:
278	no	bá:ja	gidena, ba:wá
279*	hard	jíno	míno
280	soft	líko	lí:k'o
281	many	dáro	dáro
282*	few	ts'ítta	gú:tsa
283	up	ʔúde	púde
284*	down	súlle	dúge
285	this	háí	hajgí
286*	that	jéji	hinegí
287	who	?ó:ni	ó:ne
288	whose	ó:so	ó:se
289*	what	?ábba	ájbe

¹⁷人間が「老いる」の意。一方、「古い」は galʔa。

No	English	S&C(2002)	本研究
290	when	ʔáide	audé:
291*	yesterday	ziʔjine	zine
292*	where	ʔáide	áwe
293*	here	/	ha:n, hagán
294*	how	wáizi	wá:nin
295*	why	ʔábisi	ájse
296*	clothing	ʔáfida	majó
297*	wet	ʔírta	ha:ts'ís
298	dry, of clothing	méla	méla
299*	dirty, of clothing	bú:re	k'íta
300*	garbage	/	bú:ra
301	pour, he pours	duk'é:za	du:k'ís
302*	empty	t'é:za	kájsa
303	full	kóltsi	kúmetsa, kúmsta
304	bathe	məʔ'é:za	me:ʔ'ettís
305*	lie	gá:ŋgəteza	zakk'ulís
306*	yawn	lawé:za	ʃa:kontís
307*	sleep	weiʔé:za	gisís
308	I	táni	ta:ná
309	you	néhni	ne:ná
310*	he	jínti	a
311	we	núni	nu:ná
312	thou	jíntəna	jintená, jintá
313	they	ʔónti	entatá, enta
314	push	suʔúrk'é:za	sugís
315	pull	daʔé:za	daʔís, go:ʔís
316*	jump	doŋgé:za	guppís
317	road	ʔogé	ogé
318*	fence	ʔát'ire	dírta
319	gate	féŋge	ʔəngé, karé

No	English	S&C(2002)	本研究
320a	all	ʔubái	ubbái
320b*	go	tʃ'it'éza	bis
320c	know	ʔer'éza	erís
320d	other	hará	hará
320e*	scratch	tʃ'atʃ'é:za	k'a:tʃ'ís
320f*	warm	waré	hó'ʔo
320g*	and	hanáioaba	ne ¹⁸
320h*	at	baléʃʒɛɛba	bagga

【参照文献】

- Aklilu, Y. and R.Siebert (2002) 'Sociolinguistic Survey Report of the Chara, Dime, Melo, and Nayi Languages of Ethiopia Part I' *SIL Electronic Survey Reports 2002-029*. Dallas: Summer Institute of Linguistics.
<http://www.sil.org/silestr/2002/029/SILESR2002-029.pdf>
- Bender, M.L., J.D.Bowen, R.L.Cooper and C.A.Ferguson (eds.) (1976) *Language in Ethiopia*. London: Oxford University Press.
- Fleming, H.C. and M.L.Bender (1976) 'Cushitic and Omotic,' In: M.L.Bender, J.D.Bowen, R.L.Cooper and C.A.Ferguson (eds.), 34-53.
- 乾 秀行 (1992) 「調音様式間の階層性についての類型論的研究」『筑波大学文藝言語研究 言語篇』21, 71-119.
- Siebert, R. and S.Caudwell (2002) 'sociolinguistic survey of the Melo(Malo) and Mursi languages of Ethiopia.' *SIL Electronic Survey Reports 2002-046*. Dallas: Summer Institute of Linguistics.
<http://www.sil.org/silestr/2002/SILESR2002-046.pdf>

¹⁸fai ne tukke で「お茶とコーヒー」の意。

The Phoneme Inventory of Malo

Hideyuki INUI

The purpose of this paper is to clarify the phoneme inventory of Malo, a language spoken in the South Western part of Ethiopia. According to Fleming(1976), Malo belongs to the “North Ometo” languages.

The vocabulary list used by this paper is based on the S.L.L.E.(Survey of Little-known Languages of Ethiopia) 320-Item Word List.

Malo has 10 vowels and 27 consonants. There is a contrast between long and short vowels. There are four series of stops – voiceless plosives, voiced plosives, ejectives, and implosives. The phoneme inventory is as follows.

Vowels:

/i, e, a, o, u/

/i:, e:, a:, o:, u:/

Consonants:

Stops:/p, t, ts, tʃ, k, ʔ; b, d, g; ts', tʃ', k'; ɓ, d/

Fricatives:/ɸ, s, ʃ, h; z, (ʒ), (fi)/

Nasals:/m, n/

Liquids:/r, l/

Semi-Vowels:/j, w/

Faculty of Humanities

Yamaguchi University

1677-1 Yoshida, Yamaguchi, Yamaguchi 753-8540, Japan

E-mail: inui@yamaguchi-u.ac.jp